

(5) 木曾漆器とともに生きる歴史的風致

ア はじめに

平沢地区は、市域の南部に位置し中山道や奈良井川が南北に縦断する市域南部の^{にえかわ}贄川宿と奈良井宿の間に位置し、谷あいを北流する奈良井川が大きく湾曲した河川敷に発達した集落です。

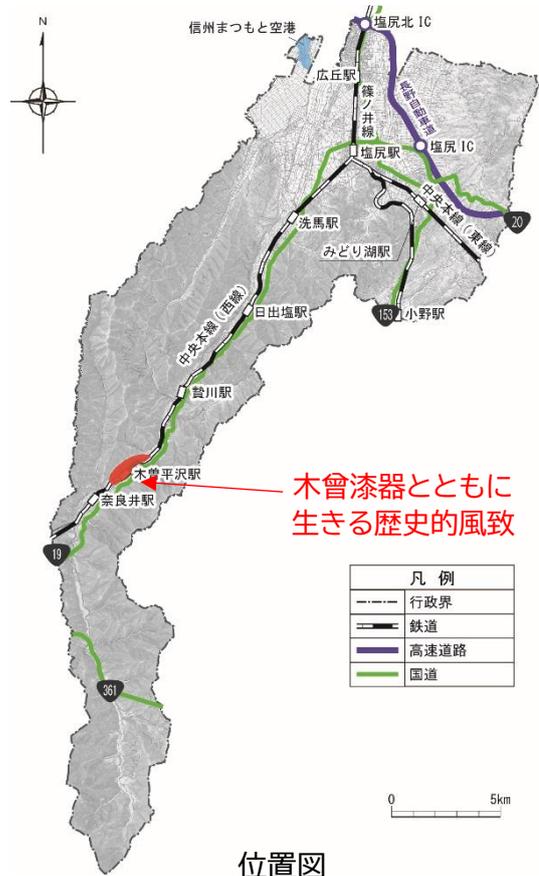
中山道の道筋は、国道19号や鉄道の敷設によってはっきりしていませんが、平沢集落の北にある諏訪神社境内には、中山道の石垣が残る坂道があり、この坂を登り諏訪神社鳥居前を通り、再び下がり平沢集落に入っていったと考えられています。

平沢は、慶長3年(1598)に奈良井川の左岸にあった道が右岸に付け替えられたことを契機に、周辺の山林付近で生活していた人々がその道沿いに居住するようになり、集落が形成されていったと考えられています。この道

は古代・中世では吉蘇路や木曾路などと言われていましたが、徳川幕府によって慶長7年(1602)中山道の一部として整備されました。

平沢は、近世には奈良井宿の在郷として位置付けられ、檜物細工、漆器の生産などで生計を立ててきました。当初は「木曾物」と総称されていた漆器も、近世後期になると「平沢塗物」の名で流通するようになりました。また、奈良井地籍のマキヤ沢で採取される良質な^{さびつち}錆土*が確保されたことから明治の始め頃には産業としての基盤が確立し、漆工町として発展しました。大正13年(1924)には新たな街路が中山道西側の奈良井川の間に築かれ、^{きんさいちょう}金西町として町は広がりました。

本歴史的風致は、日本有数の漆器生産地として発展した漆工町による風致です。



位置図

* 錆土 木曾漆器の下地に用いられ、檜川地区の山から産出される鉄分を多く含んだ土のこと。この錆土は漆とよく混和し、堅牢な下地を作る。

イ 歴史的風致を形成する建造物

(ア) 塩尻市木曾平沢重要伝統的建造物群保存地区（平成18年（2006）選定）

保存地区は、東西約200m、南北約850m、面積12.5haの範囲で、奈良井川右岸の河川敷に広がる集落とその北の丘陵に鎮座する諏訪神社を含んだ範囲です。

地区内には、通りに面する主屋に出梁造をはじめとして近世から近代にかけての多様な時代の建物が混在し、主屋、塗蔵等196棟が残っています。

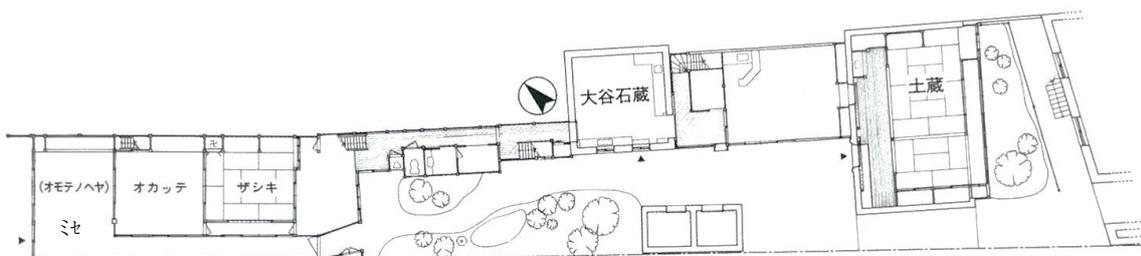
地区のほぼ中央に現在は本通りと呼ばれる中山道が南北に横断し、その西側に並行して金西町が位置しています。本通りは、道の両側で漆器の店舗を持つ主屋が多くみられるのに対し、金西町の街路は、漆器職人の住まいが建ち並ぶ店舗を持たない職人町の景観を見せています。

地区内の建造物は、漆工を行う町として多くの特徴を持っています。中山道が部分的に湾曲しているため、街路に面して「アガモチ」と称する空き地をとって主屋を建て、中庭を介して漆塗の作業場である塗蔵を配し、その奥に離れや物置などが続きます。また、主屋は間口いっぱいには建てずに隣家との間に余地を取り、塗蔵への通路とすることが多く、隙間なく主屋が連続する町並みとは異なった様相を呈しています。



木曾平沢重要伝統的建造物群保存地区

主屋は、中二階建あるいは本二階建の切妻造平入でかつては板葺石置屋根でしたが、現在では鉄板葺となっています。間口は三間が標準的規模で、平面は南側の通り土間に沿って表からミセ、オカッテ、ザシキが一行に並び一行三室を基本としますが、敷地間口の広さによっては二列六室の平面にもなります。ただし、敷地奥への通路を有する場合には、通常土間を奥まで



代表的な町家 一階平面図

通さずに敷地奥への通路との間に戸口を設けます。中山道沿いの主屋では、近代以降、ミセの床を撤去し店舗（オモテノヘヤ）とする例が多く見られますが、金西町では少数にとどまっています。

塗蔵・大谷石蔵は、二階建、置屋根の土蔵造で、湿度と温度を保てるという漆塗の作業に適した建物といわれています。内部は、1、2階ともに板敷の一室空間としていますが、2階では1階から埃が進入することのないように、階段を間仕切るようにしています。1階で下地付けや研ぎの作業が、2階では埃を極端に嫌う中塗や上塗が行なわれます。このような塗蔵は、奈良井宿に数棟見られるだけでほかに例がなく、漆器生産で生計を立ててきた木曾平沢を特徴づける建物といえます。

塗蔵のほかにも、この地域でハウゾウ蔵と称される一般的な物を収納するための土蔵もありますが、塗蔵が開口部を大きく取り引戸とする点のほかは、白漆喰塗の大壁造で共通しています。



塗蔵



大谷石蔵



塩尻市木曾平沢重要伝統的建造物保存地区

凡 例	
	伝統的建造物 主屋
	伝統的建造物 土蔵
	伝統的建造物 付属屋

(イ) 巢山家住宅 (登録有形文化財(建造物)平成12年(2000)登録)

敷地は中山道の東に面した東西に長い短冊形で、街道に面して主屋が立ち、その背後に土蔵2棟が南北に並んで建っています。主屋と土蔵の間には庭を設け、土蔵の背後には2階建の離れと平屋の小屋3棟があります

主屋は二階建、出梁造の伝統的な形式で、平面規模は桁行5間、梁行6間半北側に平屋の別棟が正面に張出して取り付いており、棟札より建築は昭和8年(1933)7月18日となっています。



巢山家住宅

ウ 歴史的風致を形成する活動

【漆器産業】

本市南部の山間に位置する檜川地区では、農地として利用できる平坦地が限られていたため、農業に従事できることが少なく、周囲の森林資源を生かした木工品加工などが住民の生活を支えてきました。

近世以前から、奈良井宿を中心に木曾の山々から産する檜により檜物細工

が行われており、それらの檜物細工は「奈良井物」と称され全国に行き渡っていました。当時、奈良井の枝郷としての平沢も檜物細工の特産地でしたが、17世紀中頃には残された史料に初めて塗物製品の記述が現れており、この時期には平沢に漆塗りの技が根付いていたと考えられています。

平沢の漆器産業は、18世紀中頃には奈良井宿と肩を並べるようになり、その後、木曾漆器産業の主産地へと成長していきました。寛延元年（1748）正月21日付けの豊嶋屋半右衛門から平沢の巢山幾右衛門（花屋）に宛てた書状（巢山直美家文書）は、花屋の「黒ゑかき重」を値下げして奈良井宿のものと同値段にするように求めており、平沢村と奈良井宿の漆器での競合を伺い知ることができます。

明治時代に入り平沢では、錆土の発見による本堅地漆器の製造技術の確立、挽曲物の技法の発明による宗和膳の生産、木曾堆朱塗の技法の開発普及などが進みました。特に木曾漆器と言われるまでになった漆器産業は、昭和24年（1949）に国から重要漆工集団地に指定され、昭和50年（1975）には伝統的工艺品産業の振興に関する法律による「伝統的工艺品」に通商産業省から指定されました。このような木曾漆器の技術やつくられた製品などは、平成3年（1991）に重要有形民俗文化財に指定され、木曾漆器館に展示されています。



木曾塗の製品

(ア) 漆器の製作

漆器製作では、生漆きうるしをフネと呼ばれる大型の器にあけ、太陽光が直接生漆に当たるように立てかけ、カイ（櫛）を用いてかき上げるように攪拌し精製します。（クロメ作業）かつては、塗師がそれぞれ春から秋にかけ地区内のあちらこちらでその作業を行っていました。近年でも、その作業は減少したものの、人力で天日利用のクロメ作業は行われており、周囲には生漆の匂いが漂います。

現在は、若手職人を中心に伝統的な木曾漆器の技術を応用し、現代の生活スタイルに合わせた製品づくりも積極的に行われています。洗練されたデザインや漆塗りの可能性に挑戦した製品、漆器を「貸す」（漆器レンタルサービス）という新たな発想の取組など伝統的な木曾漆器だけではない魅力が生み出されています。



漆塗りの風景(昭和初期頃)



漆塗りの風景(現在)



クロメ作業



漆とガラス



漆と皮

(1) 漆器祭り

昭和43年(1968)に始まった木曾漆器祭は、現在は毎年6月と10月に開催されており、県内外から多くの漆器ファンがこの地を訪れます。

6月の漆器祭りでは、町並みに約50店舗もの店が建ち並び、職人らの丹精込めた銘品や逸品をはじめ蔵出し物が店先に並びます。産地ならではの破格値の掘り出し物が見つかることもあり、それらの価格交渉も楽しみのひとつとなっています。



漆器ファンで賑わう漆器祭り

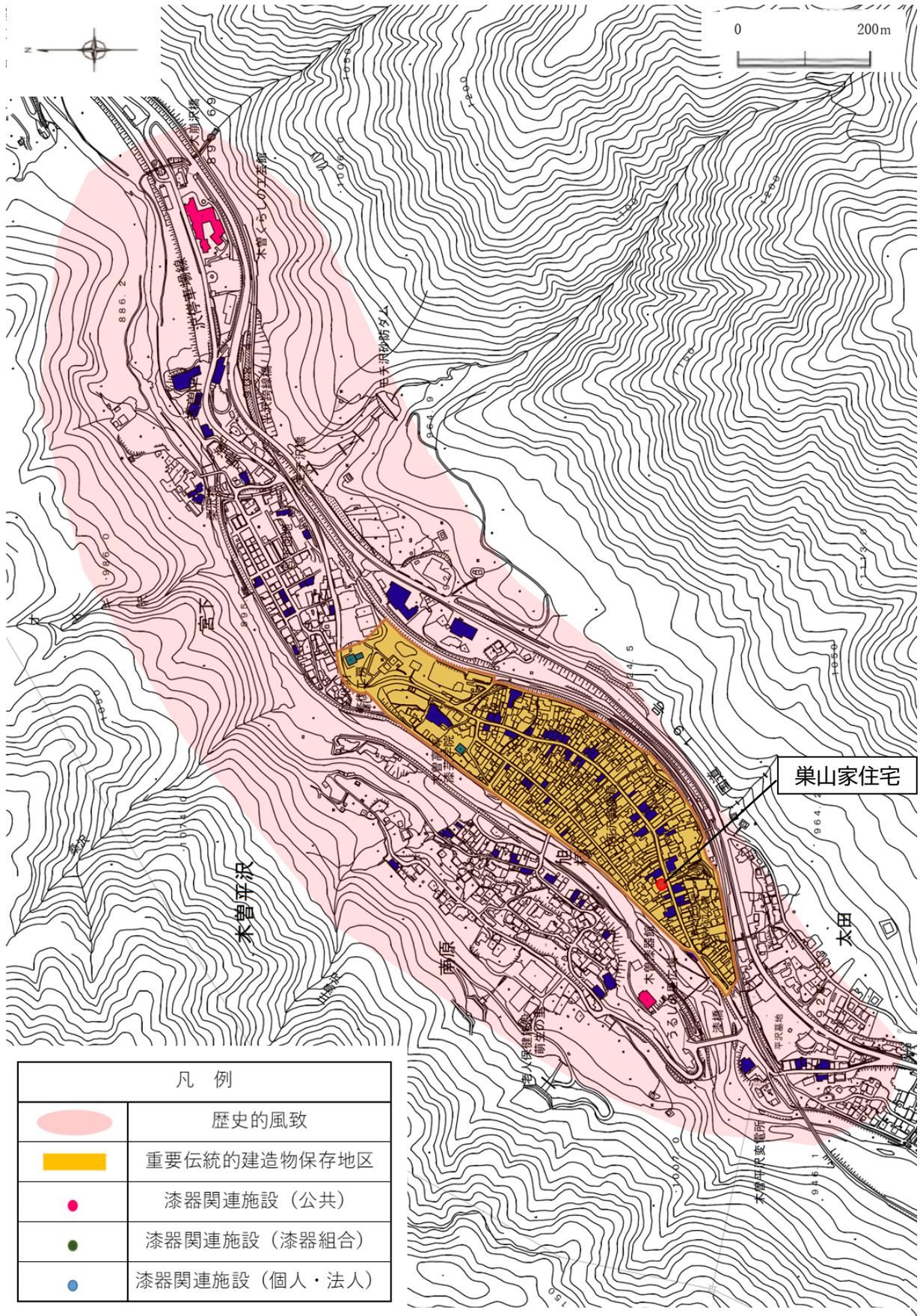


風にたなびく のぼり旗

エ まとめ

平沢は、明治時代に大火があり、江戸時代の建築はそれほど多くは残っていませんが、昭和の漆器産業が盛んな時期の工夫が見られる建造物が多く残されています。そして今でも作業場として敷地奥の土蔵を使用している家も多くあり、職人の町を肌で感じることができます。

店舗の本通りと職人の町としての金西町の街路が一体となり、漆器生産から販売までを行う町、木曾平沢は漆工の町と呼ぶにふさわしい歴史的風致を形成しています。



凡 例	
	歴史的風致
	重要伝統的建造物保存地区
	漆器関連施設 (公共)
	漆器関連施設 (漆器組合)
	漆器関連施設 (個人・法人)

木曾漆器とともに生きる歴史的風致